九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

『とりかへばや物語』における『源氏物語』摂取 : 四の君密通事件の場合

辛島, 正雄
九州大学大学院（修士課程）

https://doi.org/10.15017/12082

出版情報：語文研究. 47, pp.27-36, 1979-06-01. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

『とりかへばや物語』における『源氏物語』摂取

――四の君密通事件の場合――

辛島正雄

はしがき

＜『源氏物語』の影響＞とひとくちにいっても、その現れかたは多種多様である。作品全体の主題や構想にかかわるような場合もあれば、文飾上の詞章の借用といった場合もある。[1]

本稿は、『とりかへばや物語』における『源氏物語』摂取の様相を、物語の第一の波瀾である四の君密通事件を通して、具体的に検討してみようとするものであるが、＜密通事件＞であるから、単発的な場面・趣向・措辞等の類似の指摘を目的としたものではない。先走りするが、ここには驚くほど密着した先蹤への依存が見られる。が、にもかかわらず、作品の自律性は決して失われていないし、独自の形象化さえなしえている。したがって、そのあたりのかねあいを見定めるのが、本稿の眼目になる。以下、女三の宮・浮舟両密通事件を予備知識とした上で、四の君密通事件を筋を追いながら見てゆくことにする。

1

ある夜、宰相は、中納言に会いに右大臣邸を訪ねたが、宮中の宿直で不在であった。がっかりして、自分も宮中に行こうかと思っていると、邸内から箏の琴の音が聞こえる。四の君が弾いているのだなと垣間見したところ、月光のもと、その美しい姿があった。たちまちにして心奪われた宰相は、御前に女房もいないのを知ると、部屋に押し入り、強引に添い臥してしまう。女房たちは主人の中納言が帰って来たものとばかり思っていたが、四の君の怯える声に、乳母子の左衛門だけが、宰相の侵入と知った。しかし、時すでに遅く、秘密の隠蔽に腐心するのだった。

事件の始まりは以上のごとくである。いかにも類型的な設定・描写であり、語句・趣向・人物にそれぞれ先蹤が指摘されているが、[2]今は煩を避けて省略に従う。

ここで、四の君がひとり口ずさむ次の歌に注意を喚起しておきたい。

春の夜も見るわれからの月なれば心づくしのかげとなりけり
（34ページ）[3]

周知のように、『無名草子』が四の君を酷評する際ひき合いに出した歌だが、[4]桑原博史氏が、

「春の夜も」の歌は、この巻では絶唱ともいうべき、四の君の

心情がよくあらわれた歌である。この段階では四の君はまだ、肉体的な不満を意識していたわけではあるまい。ただ言葉の上だけで愛をちかう中納言に、本能的に信じきれぬものを感じていたにすぎないだろう。その本能的な疑いが、邸に一人置かれたとき、卒直に口をついて歌となったのである。

と解説される[5]ような理解をするとき、四の君という人物の担う問題性から、看過できない一首である。

続く密通を犯した二人の状態を見てみよう。

女君は、中納言にならひて、人はたゞのどやかに、恥づかしうう語らふ事よりほかにはなきものとのみおぼすに、いとおしたちなさけなき（宰相ノ）もてなしなるに、絶え入りぬばかり泣きしづむけはひありさまの、かぎりなくあはれに、らうたげなるに、かくてのちも、心やすくあひ見ざらん事のわりなきに、（宰相ハ）「なほ中納言はあやしかりける人かな。いみじうまめなるは、この人にこころざしたぐひなきとのみ思ひしを、さまことなりけるひじり心にこそありけれ」と、めづらかにもさま〳〵おぼゆ。

（35～36ペ）

〈契った人妻が処女だった！〉ここでは多分に「暴露趣味[6]」的な興味が働いているように思う。今井源衛先生がこの辺りを評して、この段（宰相ガ四ノ君ニ入リ臥ス条――筆者注）で、読者の目をひくのは、これまで夫の中納言との間に、肉体関係を持たなかった処女妻の四の君が、初めての異性との交わりに、惑乱して泣き臥す姿と、それを見た宰相が、中納言（女）について不審を抱くところであろう。この物語以前にたとえば『浜松中納言物語』巻五に式部卿が吉野姫君と契りを交して処女と知り、意外に思う個所があるが、その表現はかなり穏やかである。この当時の読者としては、この新奇で、しかも自然な心理表現に、にわかに出会ってさぞ驚いたことであろう。

と言っておられる[7]のも、そうした効果を認められたからであろう。

ところで、契った女が処女だったという設定は、『源氏物語』には見あたらないが、後期物語では、例えば『狭衣物語』巻一、威儀師に誘拐されそうになっている飛鳥井姫君を狭衣が救出し契りを結んだところに「ものぎたなく疑はしかりつる祈りの師の心清さも、見あらはしては[8]」とあるのは、姫君がまだ手をつけられていないきれいな身体（処女）であった、ということである。しかし、この程度では、両者になんらかの関係を想定するのは無理である。これに比べると、今井先生の指摘される『浜松中納言物語』巻五の例は、あるいは関連があるかもしれない。

式部卿宮は、一目見た中納言の妻（と思しき）吉野の姫君を忘れられず、姫君が癒病のために清水に参籠した中納言のいない隙を見計らい、盗み出してしまう。中納言は、姫君は二十歳になるまでに妊娠すると無事で過すことが難しい、という聖のことばを守り、契りを結ばずにいた。そのことを知らない式部卿宮は、姫君をついにわがものとしたとき、姫君が処女であることに気付き、訝しく思うのである。

さばかりあるかなきかに思ひしづみたる（吉野ノ姫君ノ）うつくしさは、天女の天くだりたらんを見つけたらんよりもなほめづらしく、かぎりなくあさましきまでおぼさるゝに、「中納言のとこの浦ぞかし」とおぼさるゝを、まだ世になれぬけしきを、「いなや、こはいかなる事ぞ。いもうとなど放ちては、か

ばかりの人を我手にかけて、朝夕むつびながら、けぢかう見なされぬことよ、仏聖といふとも、かたうこそあらめ。母などいひむつぶるちごなどのあるやうにこそきゝ見しか。いかなりけることぞ」とあやしうあさましきにも、云々(9)

狐につままれたような式部卿宮の表情は、宰相の不審と軌を一にするものであり、先蹤と認むべきかもしれない。しかし、それでもなお、『とりかへばや物語』の新鮮さは、いささかも損われはしないだろう。両者を比較すると『浜松中納言物語』の方には、なんとしても感情の高まりが欠けており、叙述が平板である。右の引用文の直後で、式部卿宮は、自分が盗み出したのは中納言の妻の姉妹だったのだと心得て、姫君が処女であったことを合理化しようとしている。おそらく『浜松中納言物語』の作者には、『とりかへばや物語』的効果を狙う意図はないのだろう。というのは、この設定での効果は、一に犯される女性の扱いにかかっていると思うからである。吉野の姫君をだしにして暴露趣味をもって描き出すなど、まず論外である。その点、四の君は一種の敵役であり、抵抗はあるまい。とまれ、『とりかへばや物語』作者の才筆を認めてよいところだと思う。

最初から横道に入ってしまったが、宰相の心中思惟だけに注目すると、「浮舟」巻、浮舟との密会後消耗して臥せっている匂宮を薫が見舞う場面での匂宮の心中思惟に次のようにあるのが目を惹く。

聖だつといひながら、こよなかりける（薫ノ）山伏心かな。さばかりあはれなる人（＝浮舟）をさておきて、心のどかに月日を待ちわびさすらむよ。（6）131ページ(10)

最初の一文の「かな」で言い切る語調、「ひじり心」と「山伏心」との対応、それに両者間男の寝取られ亭主に対する感想という点も一致する。ここに影響関係を認めるとすると、かなり違った場面への転用ということになるが、ずいぶん仮借のない匂宮の眼をうまく取り込んでいるといえよう。

2

夢のような一夜が明け、宰相は泣く泣く別れて帰ったが、残った四の君はいかなる状態にあったか。

a女君はましてあさましう、うつゝともおぼえぬ心まどひに、消え入る心地して、起きも上がりたまはねば、「御心地のわびしきにや」など、人々見たてまつりあつかふに、中納言、内よりまかでたまひて、入りたまへるに、b いとゞいかで見えたてまつらんと、わびしきまゝに、ひきかづきたまへるを、「などかくは」と問ひたまへば、御前なる人、「夜より例ならずおはしまして」となん聞こゆれば、いとほしく心ぐるしうおぼして、添ひ臥したまひて、「いかにおぼさるゝぞ。今まで御消息のなかりけるよ」など、いとなどやかに、あてはかに、見あつかひたまふにつけても、c いとゞめづらかなりつるけしきは、ふと思ひ出でられて、胸ふたがりぬ。（36～37ページ）

傍線部分が具体的な四の君の心理だが、

a突然のできごとにショックを受け分別もつかない。

b罪悪感に夫の顔もまともに見れない。

c有無を言わさず自分を領略した男への不条理な思慕の芽生え。

という展開である。この一連の心理の中で最も特異なものといえば、やはりcであろう。夫がありながらそれとはまた別の男により

強く惹かれてしまうという心理は、いうまでもなく、浮舟において典型的に形象されたものである。「浮舟」巻、匂宮の情熱的な態度に接した浮舟がしばらくぶりの薫の訪問を受けたときの心理を見てみよう。

大将殿、すこしのどかになりぬるころ、例の、忍びておはしたり。（中略）夕つ方、ここには、忍びたれど、これはわりなくもやつしたまはず、烏帽子直衣の姿いとあらまほしくきよげにて、歩み入りたまふより、恥づかしげに、用意ことなり。女、b′いかで見えたてまつらむとすらんと、そらさへ恥づかしく恐ろしきに、c′あながちなりし人の御ありさまうち思ひ出でらるるに、またこの人に見えたてまつらむを思ひやるなん、いみじう心憂き。　(6) 133～134ページ

傍線部分は容易に影響関係を想定できそうなよく似た表現であるが、同時に、若干のズレも感じさせる。おそらくそれは、最初の密通の状況が違うところからもたらされた差異だろう。

四の君の場合は、正しく強姦というべく、災難としかいいようがあるまい。これに比べると、浮舟の場合、匂宮はまる二日逗留して心の限りの情熱を捧げ尽くしており、いまひとつの許されざる愛とでも呼べるものである。もちろんこれによる浮舟の苦悩は免れないが、それはすでに密通その時点でほとんど完璧に象られ、以後も基本的に変わるところはない。変わるのは浮舟を囲繞する状況であり、その中にひとり孤立せざるをえない浮舟の姿が、鮮かに描き出されるのである。

茫然自失の無分別状態に叩き込まれた四の君ではあったが、それでもようやく心の働きを恢復し、徐々に自らの心の深奥に気付いてゆく。cの表現には、そうした微妙なニュアンスが、巧みに捉えられている。浮舟では理性と感情との相剋は初めから明確な形をとっていたが、四の君では次第次第にその心の秘かな部分が顕在化してくる態なのである。

以上からすでに明らかなことだが、aの四の君の心理は、浮舟像とは嚙み合わない。そこで、いまひとつのモデル・ケース＝女三の宮密通事件に目を転じると、柏木がついに思いを遂げた条に次のようにある。

a′宮は、いとあさましく、現ともおぼえたまはぬに、胸ふたがりて思しおぼほるるを、（中略）b′院にも、今は、いかでかは見えたてまつらむ、と悲しく心細くていと幼げに泣きたまふを、云々　(4) 217～218ページ

密通場面内での心理であるため、前の二つと対比するのに難点があるが、表現上の類同性は蔽うべくもない。思いもかけぬ事態に直面しての困惑、夫への罪の意識、自ら進んで考える余裕などまったくない、そうした点で、四の君は女三の宮的である。ところが、一歩突っ込んで、両者の惑乱の仍て来たるところを考えてみると、ここでもズレのあることがわかる。女三の宮の惑乱は、ひとえにその性格の欠陥から来る。森一郎氏の言を拝借すれば、「女三の宮が不始末をしでかす可能性はその幼稚な人柄の中につとに胚胎せしめられ、潜伏せしめられていた」[11]わけで、周囲の人々の愛情と誠意と犠牲にもかかわらず、起こるべくして起こった悲劇なのである。自らの幼稚さゆえに招いた災いになんら才覚する余裕もない幼稚さ――これでは子どもがそうであるごとく、涙で紛らわすより仕方なかろう。一方、四の君の惑乱は、初めて男の真の姿を知らされた衝撃の

強烈さに、しばし正常な反応もままならぬまま、感情の混沌の中を漂っている結果だと考えられる。さればこそ、後に自らの心の秘密に気付いてゆくことにもなるわけで、女三の宮のように決定的に受身では、自己への目醒めも所詮ありえようはずがないのである。

以上、一見『源氏物語』の安易な追従のごとくに見える密通後の四の君の心理のディテールが、実は、ことごとく、彼女が本当の男を知らぬ処女妻であったことに規定されているということが諒解されると思う。それを女三の宮と浮舟とのはざまで形造ってみせたことが作者の手腕なのだろう。『源氏物語』にかかずらわずとも読み過せないではないが、二重写し・三重写しにすることで、知的興趣は倍化するわけである。

自邸に帰った宰相は、四の君恋しさに身悶えするばかり。その辺りの心理描写は絶妙で、見るべきものがある。[12] 中納言の秘密を知らないままの臆測であるから、理づめで考えての結論にすっかり気落ちするのだが、読者としては失笑を禁じえない。原文について見られたい。

3

密通のショックに病づいた四の君を、中納言はやさしく看病するが、病状もさしたることはなさそうなので、父左大臣邸や宮中にも参ろうとして、出かける前に四の君をいたわる。その場面に、「浮舟」巻、匂宮との密通後、薫が宇治を訪れた場面との類似が指摘されている。[13]

女君、（中納言ガ）いさゝか　　「かの人（＝匂宮）の、のどををしくあら〳〵しきけはひ　　もなく、たゞうち語らひてすぐしつるは、つゆにても心おくふしまじりてもおぼえざりつるを、（宰相トノ）世に知らぬうき契りゆゑ、この人にも隔たりておぼえぬべき事、とおぼしつゞくるに、答へもやりたまはず、いとゞ顔を引き入れて泣きたまふけしきなれば、（中納言ハ）いと心得がたく、「もしわれをおろかなりなど、人の聞こえたるにや」と、いとほしく心ぐるしければ、うち嘆きて、「いとうまかではべりなむ。御前に人多くさぶらひたまへ。ものゝけなどのするわざなめり、心得ぬ御けしきのまじるは」と、いひおきて出でたまひぬ。　（39ペ）

心の鬼に泣く女に、その理由のわからぬ男は、だれかあらぬ噂でもたてたのか、と内省し、思いの深さを訴える。指摘は傍線部についてだが、そこに至る経緯にも関連はあろう。また、『とりかへばや物語』の傍線部は、「浮舟」巻の傍線部だけでなく、「すこしもおろかならむ心ざしにては」と続く部分をも踏まえた措辞かと思う。

り、と昨日ものたまへりしを。かかること（薫ガ浮舟ヲ京ニ迎エル準備ヲシテイルコト）も知らで、さ思すらむよ」と、あはれながらも、そなた（匂宮）になびくべきにはあらずかし、と思ふからに、ありし御さまの面影におぼゆれば、我ながらも、うたて心憂の身や、と思ひつづけて泣きぬ。（薫）「御心ばへの、かからでおいらかなりしこそのどかにうれしかりしか。人のいかに聞こえ知らせたることかある。すこしもおろかならむ心ざしにては、かうまで参り来べき身のほど、道のありさまにもあらぬを」など、云々　　（6）135～136ペ）

ところで、こうした状況――妻が不義を犯し、夫はまだそのことを知らない――での両者の描き方についてであるが、その人物がよほど世間離れしてでもいない限り、そう違った反応を示すはずもない。女は罪の意識に煩悶し、男はそれが理解できず、ともかくそんなに思い悩まぬようにとやさしいことばでもかけるのが自然の帰趨である。右の二つには、そうした同一のパターンが認められる。このことは女三の宮と源氏についても言えるようで、「若菜下」巻、紫の上の看病に忙しい源氏が宮の不例を聞いて見舞ったおりは、自らの過失に怯える宮を「久しくなりぬる絶え間を恨めしく思すにやといとほしく」（(4)222ペ）思っているし、紫の上が小康を得て久しぶりに宮のもとで二三日を過した源氏が、再び紫の上のいる二条院に帰ろうとするとき、

ここには、けしうはあらず見えたまふを、（紫ノ上ガ）まだいとただよはしげなりしを見棄てたるやうに思はるるも、今さらにいとほしくてなむ。ひがひがしく聞こえなす人ありとも、ゆめ心おきたまふな。いま見なほしたまひてむ。（(4)238ペ）

と宮に語るのは、さきの二つの場合とほとんど違わない。そのことばが心底から出たものか疑義がないわけではないが、密通が発覚するまでの夫の描き方として、一つの類型性のようなものは窺えよう。

4

参内した中納言は、女房たちの噂話で宰相が病気であることを知り、見舞いに訪ねた。この設定が、「浮舟」巻、浮舟との密事の後匂宮が病に臥せっているのを薫が見舞う（(6)131～132ペ）設定と、まったく同じ（といってよい）ものであることを指摘しておきたい。類似点は明瞭、宰相も匂宮も親友の妻を犯し、その挙句に憔悴して病気になった、そこになにも知らない寝取られ亭主（中納言、薫）のお目見えとくるわけだ。ただし、同一の設定とはいえ、描写の質はほとんど正反対といってもよいものである。「浮舟」巻では、薫の丁重で儀礼的な見舞いのことばに匂宮の錯雑した容赦ない心理が絡んで（匂宮は終始「言少な」である）、静かだが、一種異様な緊張した場面を形造っている。一方、『とりかへばや物語』では、対話形式が地の文と相俟って、軽妙なタッチになっている。中納言が数日来病人の看病で閉じ籠っていたよしを言い、宰相がその病人は誰かと訊ねるとき、すかさず「うち忘れてひがごとしつべし」（40ペ）と語り手のことばを挿入したり、中納言が宰相の病気を「御心地くるしきにはあらず。いかなる御心地の乱れぞ」（41ペ）と看破すると、宰相が「しをれ姿は、今のみや御覧ずる」（41ペ）とはぐらかす応酬など、なかなか気の利いたおかしみがある。[14]

対面を終え帰ろうとする中納言を見送る宰相は、その「にほひこぼれたる桜の花も、にほひおさるゝまでめでたき」（41ペ）姿を見るにつけ、

かゝる人に（四ノ君ハ）朝夕目馴れて、われをばなにとかは思はん。つきせずつらき、ことわりかな。（41ペ）

と劣等感にうちひしがれるが、これが、「若菜上」巻、蹴鞠の遊びのおりにハプニングから見てしまった女三の宮を、柏木がいよいよ慕わしく思う一方、源氏の「にほひやかにきよらなる」（(4)136ペ）様子を眼前にすると、

かかる人に並びて、いかばかりのことにか心を移す人はものし

たまはん。何ごとにつけてか、あはれと見ゆるしたまふばかりはなびかしきこゆべき。　(4)137ペ)

と、到底かなうべくもないことを思い知らされるのと同一趣向だ、との指摘がある。[13] これはこれで確かによく似ているが、匂宮について見てみると、薫の見舞いの直後には、「恥づかしげなる人なりかし、(浮舟ハ)わがありさまをいかに思ひくらべけむ」(6)132ペ)と、その立派な態度に焦燥を覚えているし、宮中での作文会のとき、薫が浮舟のことを偲んで「衣かたしき今宵もや」(6)138ペ)と古歌を誦じたのを聞いては、

(薫ハ浮舟ヲ)おろかには思はぬなめりかし。かたしく袖を我のみ思ひやる心地しつるを、同じ心なるもあはれなり。わびしくもあるかな。かばりなる本つ人をおきて、わが方にまさる思ひはいかでつくべきぞ。　(6)138〜139ペ)

と、嫉妬に心は燃えさかるのである。特に後者の傍線部は宰相の思いとほとんど同じである。宰相の感じるかなり強い敗北感は柏木の方に近いが、筋立てからゆけば「浮舟」巻との近似は紛れもない。出典考証的に扱うならさらに検討を要しようが、いまはとりあえず、双方とも関連ありと考えておきたい。

5

右に続き、匂宮は、焦燥と嫉妬の思いがつのり、それを引き金に、浮舟を克ち得んため「あさましうたばかりて」(6)140ペ)宇治行きを決行する。薫と会い、おのが劣勢を悟ることが、再度の密会を誘発する契機となるのである。ところが宰相の方には、そこから再び密通の起こる心理的必然性が描かれていない。「思ひやる方なく涙こぼれて、つゆまどろまでのみ夜を明かしたまふ」(41ペ)とある直後に「かくのみ嘆きいられ、人目もえはゞかりあふまじく、せめわびたまふに、左衛門、いと心よわく語らひなびかされて、中納言、例の内の御とのゐなるをり〳〵、夢のやうにみちびき入れたてまつるを、女君は、たびごとに涙にまつはれて、「つゆにても人にけしき聞きつけられては、いかでながらふべき身ぞ」と、おぼし入りながらも、云々　(41〜42ペ)

傍線部の措辞から、「若菜下」巻に次のようにあるのが想起される。

かの人(柏木)は、わりなく思ひあまる時々は夢のやうに見たてまつりけれど、宮は、尽きせずわりなきことに思したり。院をいみじく怖ぢきこえたまへる御心に、ありさまも人のほども等しくだにやはある。　(4)234ペ)

匂宮と浮舟との逢瀬は二度限りであったが、宰相は柏木と同じく、何度にもわたって「夢のやうに」密会を重ねている。「わりなく思ひあまる」とは「理性で処しがたい柏木の情念をいう」[15]が、宰相にも柏木の憑かれたような思考・行動が継承されているのかもしれない。そう考えると、この繋りの悪さも、柏木的理不尽さを承けての宰相の心理→行動として、必然性があるのかもしれない。だが、どうもそうではなさそうだ。

宰相は、所謂〈匂宮型〉の人物である。〈薫型〉の中納言とペアをなすわけだが、[16]「匂ふ兵部卿、薫る中将」(「匂宮」巻(5)22ペ)と並び称された本家に比べると、「かたちありさま、いと侍従(中納言)のほどにこそにほはね」(16ペ)と最初からあるように、す

べてにおいて中納言に一籌を輸するため、どうしても劣等感を抱かざるをえない。匂宮が絶えず薫にライヴァル意識を燃やしているのとは違いがある。ここにおいて、宰相は、源氏と絶対的な落差のある柏木に比しうることになる。さきの宰相の敗北感は、この点納得できる。しかし、宰相は、柏木のごとくに打ちのめされているわけではない。ダメージが恢復すれば、じきに好色の虫が頭を抬げる。ここの繋りの悪さ、宰相の行動に及ぶ心的経過の飛躍は、こうした経緯がまったく描かれていないためではなかろうか。前を柏木的に読みとって連続的に理解しようとすると、やはり釈然としないものが残る。ここからは、柏木的な鬱屈状態からすでに立ち直り、平常態の匂宮性を恢復した宰相のイメージで理解すべきなのである。同じく「夢のやうに」密会を重ねるとはいえ、柏木のパトスはすり替えられ、単なる情欲に堕してしまっている、とも言えようか。

さて、四の君は不義を他人に知られては生きていられないと「おぼし入り」、女三の宮は源氏を「怖ぢきこえ」ている。密事露見を恐れ小心翼々とならざるをえないという点、ここまではよく似ている。ところが、四の君では「おぼし入りながらも」と逆接で続いて、以下その心理変化の様相が刻明に描かれることになるが、女三の宮の方は「尽きせずわりなきこと」と思う恐れと嫌悪一色、もはやそれ以上の思慮分別の余裕もなく、ここで断止する。

続く四の君の心理描写にも「浮舟」巻との類似が指摘されている。[13]

ほのかなる行きあひのをり
〳〵、うつし心もなきまで、
泣きまどひいらるゝ（宰相ノ）

さま、なまめかしうあはれげなるも、たびかさなれば、見知られたまはずもあらず。

a 中納言のいとめでたくすぐれながら、よそ〳〵にて、人目ばかりなさけあるさまに、のどやかにさまよき目移しには、b かういといみじく、死ぬばかり思ひいらるゝ人を、c こころざしあるにこそと思ひながら、d けしきにても人のもり聞きたらん時と、おそろしうそら恥づかしきに、人知れぬあはれのみ知られずしもあらずなりにけるも、われながらいと心うと思ひ知らるゝ。（42ペ）

両者の関係は疑うべくもないが、念のために共通項を括ってみると、女は、夫の「さまよ」き愛し方より、「いといみじく、死ぬばかり思ひいらるゝ人」あるいは「時の間も見ざらむに死ぬべし、と思し焦がるる人」の方が、「心ざし」が深いに違いないと思う、というわけである。しかし、表現だけを取り出して比較すると、ほとんど引き写しとも言える合致が見られながらも、文脈の中で捉えられる四の君と浮舟との人間像は、必ずしも似ているとばかりも言えない。

女、a′いとさまよう心にくき人を見ならひたるに、b′時の間も見ざらむに死ぬべし、と思し焦がるる人を、c′心ざし深しとはかかるを言ふにやあらむ、と思ひ知らるるにも、あやしかりける身かな、d′誰も、ものの聞こえあらば、いかに思さむと、まづかの上（匂宮の妻＝中の君）の御心を思ひ出できこゆれど、云々（6）121～122ペ）

末尾に「人知れぬあはれのみ知られずしもあらずなりにけるも、われながらいと心うと思ひ知らるゝ」とあるのに注意されたい。「浮舟」巻との対応関係からいえば「あやしかりける身かな」の敷衍なのかもしれないが、それはどうでもよい。この一文を、

●春の夜も見るわれからの月なれば心づくしのかげとなりけり（34ペ）

●いとゞめづらかなりつるけしきは、ふと思ひ出でられて、胸ふたがりぬ。（37ペ）

と繋る四の君の一連の心理表現の中に位置づけるとき、さきに「四の君では次第次第にその心の秘かな部分が顕在化してくる」と述べておいたが、これまでは識閾下にあったなにかが目醒め、宰相に対する激しい思慕となって自覚されたことがわかる。

なにかとはなにか。それは「性愛」[17]であり、「肉体的愛情」[18]である。

いうまでもなく、中納言と四の君との夫婦関係は、精神的ののみの〈虚像〉にすぎない。そこに闖入して来る宰相とは正しく〈男〉であり、四の君は否応なく〈実像〉に直面させられる。〈虚像〉はあえなく敗退し、四の君は〈男〉にのめり込んでしまう。

これまでの叙述を読んで奇異の感を覚えさせられるのは、この密通事件がまったく一方的なものであり、肉体関係を結んだこと以外、四の君には宰相とのなんの共有感もないということであり、にもかかわらず、四の君の宰相思慕はいやましに大きくなるということである。これは、浮舟と匂宮の場合のような、互いの精神を領略せんとするものではない。とすれば、「浮舟」巻のあの二度の密会の描写の詳細・精彩は、ここでは無用である。必要なのは、四の君が犯されるという行為上でのこと、しかもそれで十分なのだ。「性愛の開眼」[17]と称する所以である。最初に言及した『浜松中納言物語』の処女妻吉野の姫君の場合[19]を思い合わせると、その径庭の大きさは、対蹠的とも言えそうである。

むすび

紙幅も尽きた。はじめに四の君密通事件を扱うとは言ったものの、右で触れえたのは引用テキストでわずか九ページあまり（33ペ7行〜42ペ9行）にすぎず、事件全体として先蹤といかなるかかわりをもちつつ展開しているか、という点については、窺うべくもない。以下は、そうした点を含めた、現時点での私なりの理解の一端である。

浮舟密通事件との関係の密接なことは、文章のはしばし、筋立てからも、ほぼ示しえたと思う。ただし、一見剽窃と疑いたくなる数々の相似を見せながらも、それらがコンテキストの必然性に支えられ、自らの作品の中に十分に生かされていることを忘れてはならない。例えば、四の君が浮舟の模倣だという指摘は容易だが、それも、物語の文脈の中に定位されれば、ただちにその論理に従い独自の相貌を呈することになる。そして、その独自の相貌を見定めることで、作品理解の端緒は初めて開かれるのである。つまり、浮舟の変奏（ヴァリエーション）であるという理解から、浮舟のいかなる変奏であるのかという理解に深めることが肝要なのである。

女三の宮密通事件との関連は、右に触れた限りでは、さほど顕著ではない。しかし、四の君密通事件の展開が、以後、妊娠→出産と続くため、そこでの中納言—四の君—宰相の関係は、これまでの薫

―浮舟―匂宮の関係というより、源氏―女三の宮―柏木の関係を思わせるようになる。罪の子誕生後の一場面が瞭然たる「柏木」巻の場面摂取[20]になっていたり、物語読者にはおなじみであろう、密夫の正体発覚の趣向[21]のことなどもあるが、後考に俟ちたい。

とまれ、『とりかへばや物語』の研究にあっては、『源氏物語』摂取という観点からだけでも、なお解明されねばならぬ部分が多いと思う。ただ、こうした影響関係の追求には、影響作品・被影響作品双方への精通が前提であり、加えて、その認定の基準がはなはだ曖昧・微妙でもあるため（総索引で手あたり次第というわけにもゆかない）、本稿をなすにあたっても力の及ばなさを痛感する。先学諸賢の御叱正をお願いする次第である。

（一九七九年三月稿）

〔注〕

（1）福田秀一氏は、影響の受け方の型を四段階に区分される。「中世文学における源氏物語の影響」（『中世文学論考』〈昭50〉所収）参照。

（2）宮田和一郎「とりかへばや物語」（『物語文学攷』〈昭18〉所収）や（7）等参照。

（3）『とりかへばや物語』の引用は鈴木弘道『校注とりかへばや物語』（昭51）に拠る。

（4）「四の君ぞ、これは憎き。上はいとおほどかにらうたげにて、（歌）と詠むも、何事のいかなるべしと思ひて、さばかりまめに、分くる心もなき人を持ちながら、心づくしに思ふらむと思ふだに、おいらかならぬ心のほど、ふさはしからぬを、云々」（桑原博史　新潮日本古典集成『無名草子』〈昭51〉85ぺ）。

（5）講談社学術文庫『とりかへばや物語㈠』（昭53）。

（6）中村真一郎「とりかへばや物語」（『王朝文学論』〈昭46〉所収）。「（『トリカヘバヤ物語』ハ）はなはだ暗澹たる宿命に追われる人間の姿を、度外れの感傷主義と暴露趣味とによって描き出したものである」。

（7）鑑賞日本古典文学12『堤中納言物語・とりかへばや物語』（昭53再版）。

（8）「日本古典全書」本（上）231ぺ。

（9）「日本古典文学大系」本406ぺ。

（10）『源氏物語』の引用は「日本古典文学全集」本（六冊）に拠る。

（11）「女三の宮創造――幼稚な人柄の意味するもの――」（『源氏物語の方法』〈昭44〉所収）。

（12）（5）および（7）を参照されたい。

（13）井上君江「『とりかへばや物語』にみられる『源氏物語』の影響――趣向の類似について――」（『立教大学日本文学』17号　昭41・11）。

（14）海老沢秀直「とりかへばや物語とその心理分析」（『国文学研究』臨時号　昭26・9）参照。「実にデリケートな両者の際疾い心理線を濃刺と描出していて作者の近代性ある心理小説的手腕の程が窺える」と評しておられる。

（15）日本古典文学全集『源氏物語四』（昭49）該当個所頭注。

（16）藤岡作太郎「とりかへばや」（『国文学全史　平安朝篇』〈明38〉所収）。

（17）（7）に同じ。「四の君に課せられたものは、女の性愛の問題であろう。女の性愛の開眼は、（中略）『源氏物語』でも宇治中君の場合などにひかえ目に触れられてはいたが、もとよりあらわにではなかった。しかし、この物語の四の君は、その点、実に丹念執拗に追跡される」として、具体的に検証されている。

（18）（14）に同じ。「宰相は偶然の機会を得、北の方四の君と密通してしまう。はじめてそこで四君は男女の肉体的愛情を悟らされ、対異性的本能感の然らしむるところ遂に求愛してくる宰相に恋慕を寄せるようになる」。

（19）吉野の姫君は中納言を恋い慕うばかりで、湯水も喉を通らず、すっかり衰弱してしまう。せっかく姫君を盗み出した式部卿宮も、さすがに見かねて、中納言に連絡をとり、引き取ってもらうしかなくなる。

（20）これまで指摘をみない。

（21）（2）に指摘がある。新しくは、土岐武治「とりかへばや物語における源氏若菜下の影響」（『解釈』昭50・1）。